

# 日本の内視鏡受診の現状と、早期検査の重要性について

## 健診で防げたがん死亡が指摘されています

「症状がないから大丈夫」、「内視鏡検査は辛そうで怖い」といった理由で、胃や大腸の健診を先延ばしにしている方は少なくないのではないのでしょうか。実は、日本人の内視鏡検査件数は、本来あるべき数に対して不足しているといわれる現状があります。ここでは、なぜ定期的な検査が必要なのか、統計データをもとにご説明いたします。

## 胃がんと大腸がんの罹患率について

国立がん研究センターの統計によると、日本人が一生のうちのがんと診断される確率は、男性で約60%（5人に3人）、女性で約50%（2人に1人）に達しています。その中でも、大腸がんと胃がんは罹患数において常に上位を占めています。特に大腸がんは、近年の食生活の変化もあり、**女性の部位別死亡原因の第1位、男性でも第2位**（2022年データ）となっています。これらは、私たちにとって最も注意が必要な疾患の一つです。

## 健診の重要性

日本対がん協会などの報告では、**適切に検査を受けていれば防げた死亡例が少なくない**ことが指摘されています。例えば、市区町村が行う健診（便潜血検査）の受診率は50%に届かない地域が多いのが現状となっている他、便潜血検査で「要精査」と判定された場合は、内視鏡検査に進むことが望ましいものの、**約3割がその後の内視鏡による精密検査を受けていない**というデータもあります。大腸がんは、早期に発見できれば内視鏡での切除によって高い確率で完治が望めますが、発見が遅れ進行した状態で見つかるケースが今もなお続いています。

## 内視鏡検査の役割と特徴

内視鏡検査が他の検査（胃のバリウム検査や大腸の便潜血）と決定的に違うのは、医師が直接粘膜を観察し、その場で小さな病変（がんの芽）を発見できることにあります。

- 胃内視鏡（胃カメラ）：ピロリ菌感染が疑われる慢性胃炎（将来の胃がんリスクとなります）や、ごく初期の早期がんを特定します。
- 大腸内視鏡（大腸カメラ）：ポリープ（将来の大腸がんリスクとなります）を早期に発見したり、症状がない早期がんを発見することができます。

当センターでは、これら健診としての検査だけでなく、内視鏡手術によるがん治療など高度な専門治療まで一貫して行っています。

## 「症状が出る前」の検査を

がんは初期段階では自覚症状がほとんどありません。「痛みがない」「血便が出ていない」といった状態は、健診を受けなくてよい理由とはなりません。症状が現れてから見つかるがんは、すでに進行している可能性が高いのです。健診を活用して、早期に発見し、将来のリスクを未然に防ぎましょう。日本は内視鏡発祥の国であり、技術は世界的に見ても非常に高い水準にあります。当センターでは最新の機器を揃え、鎮静剤の使用など、検査に伴う不安や苦痛を抑えるための体制を整えています。

ご自身やご家族の健康のために、後回しにせず一度当センターへご相談ください。